スウェーデン社会研究所　所報　第 364 号

【目次】

スウェーデン研究講座　第 157 回　　2014 年 1 月 24 日
「最初に日本に来たスウェーデン人は誰か―スウェーデン・日本人物交流史」
Sven Eriksson　　エリクソン・ジャパン前副社長

スウェーデン研究講座　第 158 回　　2014 年 2 月 12 日
「日本の若者から見たスウェーデンと日本：比較分析による考察」
明治大学国際日本学部　鈴木賢志ゼミ

スウェーデン研究講座　第 159 回　　2014 年 3 月 27 日
「スウェーデンの環境保護活動の実態― 自転車利用の促進を例として」
Erik Beckman　NGO スウェーデン自然保護協会(SSNC)ストックホルム支部長

スウェーデン研究講座　第 160 回　　2014 年 4 月 16 日
「スウェーデン―高齢者と障害者はどこまで自立出来るか」
Emil Ostberg　　Sweden Quality Care

スウェーデンのニッポン人（６）

スウェーデン研究講座　第 157 回　　2014 年 1 月 24 日

「最初に日本に来たスウェーデン人は誰か―スウェーデン・日本人物交流史」

Sven Eriksson　　エリクソン・ジャパン前副社長

（日本語で講演）

日本に来た最初のスウェーデン人はだれでしょうか。どんな人だったのでしょうか。今回は誰も知らなかった謎をスベン・エリクソンさんが解き明かしてくれます。スベンさんは世界一の通信会社エリクソン・ジャパンの副社長として 20 年近く、ドコモや au、ソフトバンクなどにインフラ設備を供給し、日本の

モバイル市場の発展に貢献してきました。その傍ら、標題について、スウェーデン国内だけでなく、オランダ、ライデン大学にも何度も足を運び、ついにこれまで誰も知らなかった事実を見つけました。江戸初期に来日した最初のスウェーデン人、ヨハン・オロフッオンにまつわる興味深い話を紹介します。(講演案内から)

(編集部からのお断りとお詫び)講演内容は収録しましたが、画面説明が多く、誌面再録は不十分の内容です。このため、内容については箇条書きで記すのみにしました。また、Sven さんが指摘する様に、表題の人物のスウェーデン人については諸説があります。中でも既存の文献・資料で知られている人物としては「ベーリングの大探検」(世界教養全集 23・平凡社.1961)を記した S・ワクセル(Sven Waxell　1701-1762)(ロシア海軍に入隊し、1733 年から 49 年のベーリングの探検航海で副官)や「江戸参府随行記」（東洋文庫 583、平凡社。1994 年）を著した医学者・植物学者の C・P・ツュンベリー(Carl Peter Thunberg 1743-1828)がいます。
前者はワクセルの上官は日本人について「その能力は侮れない国民性を持っている」とし、「日本こそ、やがて親交を結ぶべき国である」と叫んだとしている。また後者はツュンベリーは、1775（安永 4）年 8 月に長崎に着き、翌年春にオランダ商館長フェイトの江戸参府に随行、同年 12 月に離日した。1770 年から 1779 年に渡るヨーロッパ、アフリカ、アジア旅行記は 1788-93 年にかけてスウェーデンで出版され、東洋文庫版はその日本に関する部分であるとされている。（欧米から見た日本からの要旨を抜粋し、　転用）
なお、Sven さんの講演は以下の通り。
:ヨハン-オロフッオンに関する古本は 2000 年にストックホルムの中心街にある古本屋で購入した。約 40 頁。発行は 1678 年。
:読んだ時の感想については「彼の一連の行動は本当なのか疑問をもった」とか。内容の史実を裏付けるためオランダやライデン大学、友人のオランダ人に

はオランダ語の翻訳を依頼した。また、走行ルートの確認にケープタウンやタイにも足を延ばした。

:長崎に来た日時は 1647 年 4 月 2 日とある。

:出版するつもりで現在まとめているが、発刊予定は 2018 年。

スウェーデン研究講座　第 158 回　　2014 年 2 月 12 日
「日本の若者から見たスウェーデンと日本：比較分析による考察」
明治大学国際日本学部　鈴木賢志ゼミ

①阿慈谷修平『ワークライフバランスと個人主義・集団主義』
本論文では職場と家庭における個人主義・集団主義がワークライフバランスに与える影響について、日本とスウェーデンを比較分析した。ISSP や OECD のデータからは、職場・家庭の双方において日本は集団主義、スウェーデンは個人主義の傾向が強いことが明らかになった。またスウェーデンは勤務時間の柔軟性や、夫婦間でのジェンダー平等意識の高さにより、日本に比べワークライフバランスを向上しやすい環境にあることが考察された。さらに本研究では相関分析を行い、個人主義とワークライフバランスの高さには中～強程度の相関性があることを明らかにした。最後に今後の日本における政策について提言した。

②中島敦美『ニトリと IKEA の違いは何から来るのか』
近年の日本における北欧ブームである。そこで、日本発祥の「ニトリ」と北欧発祥の「IKEA」がつくり出す子供部屋のモデルルームに漠然とした違いを感じた。その要素を 3 つ仮定し、探っていく。1 つ目は、色である。ニトリでは特に青とピンクを好み、男女で色を区別する傾向にある。一方 IKEA は、原色を中心に様々な色を性別関係なく使用している。 2 つ目は、机である。ニトリでは、子ども部屋といえば学習机のセットというほど、２つは密接に関係している。一方 IKEA は、学習机というキーワードはなく、子どもも大人も使えるシンプルなデザインのものが主流である。3 つ目は、価値観である。子ども部屋とは、IKEA では個を尊重する空間、ニトリでは勉強をするための空間であるという概念が、過去から現在にかけて受け継がれている。以上より、ニトリと IKEA の子ども部屋は、「色」「机」「価値観」の 3 つの要素から違いが生まれていることが明らかとなった。

③岩崎結子『スウェーデンと日本の観光競争力の違いを探る』
近年、日本の観光を取り巻く環境の変化が目覚ましい。それに伴って観光政策の優先度も上がってきており、日本は世界経済フォーラムの「世界観光競争力ランキング 2013」で 140 か国中 14 位である。また、スウェーデンは同ランキングで 9 位である。ここで「両国の観光競争力の強みは異なっている」と仮説を立て、「環境」「人」「文化」という 3 項目を比較し検証する。その結果「人」「文化」の面で両国とも独自の強みがあった。また「環境」面でスウェーデンはサスティナブル・ツーリズムの推進に積極的である一方、日本は持続性の概念がないことが課題であると立証された。日本は今後、現在保有する強みを活かしつつ、長期的な運営を考えたツーリズムを推進すべきではないだろうか。

④濱本春奈『高齢者労働の可能性』
日本とスウェーデンは少子高齢化により、福祉国家の基盤を支えることが困難になっている。その解決策として高齢者の労働力の活用が期待されるが、高齢者の労働意欲は概して低い。そこで本研究は日本とスウェーデンを例として、高齢者の労働意欲の要因を掘り下げ、これを高める方策について考察し、日本では自発的な就労を促し、かつ健康上の支援を行うこと、またスウェーデンでは職業を多様化させることが重要であることを明らかにした。このように高齢者の労働意欲の向上には、万国共通の処方箋があるわけではない。それぞれの国民意識や社会システムを考慮しつつ、それぞれの国に見合った対策を実施することが望まれる。

⑤山本美紗樹『スウェーデンはなぜ先進国の中でも特に同性愛について寛容なのか』
スウェーデンが先進国の中でも特に同性愛に寛容であることは、同性愛者への権利、LGBT イベントの規模、意識調査からも明らかである。　スウェーデンはなぜ同性愛に寛容なのかという疑問に対し、「スウェーデンは自分の意見を

言えるオープンな環境がある」「スウェーデン人は性別分業意識が低い」「スウェーデンでは標準的な結婚がすべてではなくなっている」の 3 つの仮説を立て検証した。　その上で最近の動向を踏まえ、日本について展望をし、日本は今後若者を中心に同性愛への寛容性が高まってくると結論づけた。

スウェーデン研究講座　第 159 回　　2014 年 3 月 27 日

「スウェーデンの環境保護活動の実態― 自転車利用の促進を例として」

Erik Beckman　NGO スウェーデン自然保護協会(SSNC)ストックホルム支部長

英語講演(通訳・中川弘子)

自転車の問題とスウェーデン環境保護団体についてお話します。日本は今回で５回目。また訪日出来て嬉しく思っています。とりわけ東京で興味を魅かれたのは１つあります。それは、通りに車が駐車されていないという事です。スト

ックホルムでは殆ど全ての通りの脇は駐車スペースとなっています。この違いは土地スペースが少ない東京では駐車をさせないからだと思いますが・・・。
初めに、私自身の事について少しお話をして、次になぜ私が環境問題に興味を持っているのか、また、持ったのかについて話を進めていきたいと思います。
私が 14 歳の時に、当時のストックホルム市議会の政党、ストックホルム党に所属しました。まずはその話から。当時、この党は市議会で数名の議席を持っていたのですが、その党の青年部の議長を私が勤めました。私は今、34 歳ですが、この 20 年間、ＮＧＯとか環境問題に取り組んできた事になります。そのうち 12 年間はその機関に勤め、あるいはコンサルタントとして関わってきました。スウェーデンにおいて、環境への関心はとても大きいのです。多くのスウェーデン人が自然に興味を持っており、自然の中に過ごしていて、55%のスウェーデン人は夏の家を所有し、５週間から７週間の年次休暇を夏の海辺で過ごします。映し出された画面に出ているのが、典型的なスウェーデンの伝統的な夏の家で、私はここ 10 年位、毎年このような所で夏の間を過ごしています。
スウェーデン人の自然への興味とか、環境への関心は、こういった自然へのすぐ近くで、また、自然の中で夏の家で暮らしてきたというところからだと思います。その事は私にも言える事で、私の家族の夏の家は、スウェーデン北方の群島地域にあります。子供の頃は、この画面にあるような家で過ごしたわけですが、この夏の間に蛇や蛙を捕まえて過ごすなどしました。また、秋には色々なベリーを摘んだり、キノコを摘んだり、動物にも接してきました。例えば、画面に写るのは蛇ではなく、トカゲの一種です。つまり瞬きをするので蛇ではないと分かります。
さて、私が５歳か６歳の時に、私の夏の家のパラダイスが脅かされることになってしまいました。それは私達の島に黒い原油が流れてきて、海岸が汚染されてしまったことです。原因は沿岸を走行していた輸送船から原油が漏れて来たためで、その船は海岸に座礁したのです。このため、私達は当時、毎日、海で身体についてしまった原油を砂と石鹸でこすり、落とさなければならない状態

でした。ほぼ時を同じくして、ソ連のチェルノブイリの原子力発電所事故が起こり、スウェーデンは広範囲にわたって放射能に汚染されてしまいました。そう言う事もあり、私はごく自然に自然保護というものに関わっていく事となり、また、当時よりも今の方がこの島に暮らす期間が長く、１年のうちの半年はこの島に暮らしている状態になっています。そして島にある地元のユースホステルの経営とレストラン経営で過ごしています。このほか、冬の間は環境保護団体の中で働いていますが、この事はとても良いコンビネーションだと思っています。それは夏の間にこの島で過ごし、冬の間に環境団体で働くという事です。島の 75%は自然保護地区になっています。

（画面に映る地球の絵画を指さし）人類がこれから気候変動など何か大きな問題に直面するのはかなり明白でしょう。ですから、人々にその問題を知ってもらうという事が非常に重要だと思います。前述しましたが、その最良の方法は私達の子供達に自然の中で暮らせ、「自然に親しませる」という事が大切な事ではないかと思います。スウェーデンでは幼稚園児が近所の自然に触れたり、農場を訪れたりとか自然の環境について話したり、話し合ったりします。これらの事を踏まえ、私達から送るアドバイスは、子供達に出来るだけ早い段階で、自然というものを発見させ、自然の良さや価値を発見させるという事が良いのです。

スウェーデンでは、自然保護区や周りにある森林や山々を訪れたり、田舎を体験したりする事はとてもたやすい事で、我々は万民権とか万有権とかいわれるものがあり、人々の自然の享受する権利を持っています。その法律は全ての国民に与えられている権利で、土地の所有者の許しがなくても、土地に入って歩き回るとか、キノコや花やベリーを摘み、キャンプをする事も出来ます。人によっては、「自然は危険だ」と考える人もいますが、それは知識不足から来るものだと思います。実際に大人や子供に皆に危険な物があるとすれば、それはストレスがかかった都会での生活環境でしょう。毎日のように交通事故で人が亡くなっていますが、大自然の中ではその様な事は起こりません。

スウェーデン環境保護団体の中では、私は主に自転車問題と持続可能な交通手段について専門的に対処しています。自転車問題については後で述べる事にして、最初にこの団体についてお話します。この団体は、100 年を超える歴史がある古い団体です。政治家に圧力をかけたり、法律に影響力を持ったり、スウェーデンの国民に雑誌や書籍、それから自分達で作っている季刊誌などさまざまな媒体物で情報を提供しています。この団体はここ何 10 年にわたり、スウェーデンで最も影響力のある環境保護団体であり、目下 20 万 3 千人の会員がいます。この数字はスウェーデン人口の２％に当たります。
さて、スウェーデンは国内的にも、地球規模でも、また、気候変動にあるとか、海と漁業、森林や農業そしてこれらを取り巻く環境が優先分野です。これまで長い事、種の保存計画にも取り組んできました。70 年代に絶滅の危機にあった、ハヤブサ、オジロワシ、オオアカゲラといった大型の鳥類を保護しています。他にも世界で一番審査の厳しい環境に優しい製品である「環境に良い選択」（グーデンエルマメントチョイス）という様なラベルを推進している機関でもあります。とりわけ我々の団体活動は、これらに貢献してきました。それは第一に洗剤のリン酸鉛の使用が５年から 10 年前に禁止されましたし、ダーラナ地方のスティアン山の開発を阻止したり、ストックホルム市内道路の渋滞緩和に道路課税導入にも働きかけました。これは第２の都市であるエイテボリ市に導入されています。そして多くの森林が今まで保護されてきました。また、トリクロサンという殺菌剤はスーパーマーケットからは姿を消していますし、オジロワシはストックホルムの群島では多く見かけるようになりました。
気候変動は重要な事です。北極は 2030 年代に完全に氷の海表面を失うのではないかと言う学者もいますし、世界の海水面が 2100 年までにあと 90 年ぐらいまでに 1.5 ﾒﾄﾙまで上昇するかもしれないと言われています。これら、気候の危機と、開発の危機を同時に解消するための解決策が求められています。環境団体がスウェーデンや EU に望む事は、第１に温室効果ガスを 2020 年までに少なくても 40%削減し、2050 年までには少なくとも 90%削減をする事です。２番目に、2050 年までに国民１人あたりの温室効果ガス排出量の目標を最大 0.5 ﾄﾝ

下げる事です。そして EU は世界の公共投資数千億ユーロのシェアになっているのですが、そこで気候と開発に関して世界的規模で取り組みをしないといけないと思います。もっとも、私の述べてきた事は賛否両論のあるところですが、この地球温暖化については何かしなくてはならないのではないでしょうか。

魚の獲り過ぎは深刻な世界的規模の問題であって、世界の海岸沿線に暮らす人びとの食糧へのアクセスを脅かすものです。バルト海では、水の花と言われるアオコの異常発生であるとか、死んでしまった海底などが段々と一般的になっている変化というものがあります。我々が望む事としては底引き網のトロール漁業を禁止する事。それから魚の採り過ぎを禁止する事にあります。スウェーデンでも、また世界的に行われていると思いますが、違法な漁法をストップさせる事です。

次に森林問題について。スウェーデンには本当にたくさんの森林がありますし、多くのスウェーデン人がそういった森の中で過ごす事をとても愛しています。でも、これらの森林がスウェーデンでは保護されてはいないと言う事を皆さんはご存じではないでしょう。スウェーデンではたったの４%が保護地区になっていますが、他の国々や国際的に見ても状況はスウェーデンと同様に悪いものでしょう。望む事はスウェーデンについては森林保護の割合を引き上げる事にあります。そして残っている原生林を保護していく事や地球規模の森林を持続可能な使用方法を推し進めていく事にあります。産業としての農業が公害とか土地の劣化や多くの生物種の生息地を奪う事に繋がっていきます。世界の人口が拡大していく、こういった状況下で気候変動の脅威に直面していますし、持続可能な農法の必要性が世界中で緊急課題になっていると思います。このほか、危険な化学物質にさらされています。1959 年に使用された化学物質量は 700 万㌧でしたが、2000 年までにこの数字が 2 万 5 千㌧と増加しています。もう１つ重要な事は、我々がやっている環境に優しい商品ラベルの推進です。スウェーデン環境保護団体は、約 20 の国々にある 50 前後の組織と関わり活動しています。その国々はアフリカ、アジア、ラテンアメリカ、東ヨーロッパに

またがり、また、世界規模であったり、EU の中でも様々なネットワークに参加しています。もちろん国際的な協力は必要になって来ている訳ですが、今、気候変動は世界規模で起こっているからです。これらの環境保護団体の世界的な活動は、スウェーデンの国際開発局からの出費で賄われています。その他の資金は 20 万 3 千人にのぼる会員とか、その他の色々の公共機関からの出費でまかなわれています。

都市問題に目を向けてみましょう。そちらが私の得意分野ですし、この 10 年間は政治家とずっと折衝し、その結果としての変化をもたらしてきた事をお話します。それは都市計画とか持続可能な交通手段問題です。都市では、車の交通問題が大きな事になっており、例えば、交通渋滞、スモッグ、タイヤやエンジンの騒音といったことに及びます。ストックホルム市内でもそういった問題を抱えています。ストックホルムの都市は西暦約 1200 年前後に始まり、今では市内の住民は約 100 万人、これを合わせた 200 万人が都市部に暮らしています。でも、この数字は東京と比べれば、ストックホルムはとても小さい街でしょう。

ストックホルムには、1870 年代に初めて路面電車が導入され、この電車の沿線に新たな住宅が次々と作られていきました。そして郊外の住宅地とストックホルムの中心地を結ぶ公共交通システムは大変機能しています。しかし、郊外の住宅地とストックホルムの中心部の通勤は車の公害を発生させました。もっとも、1940 年代の第二次世界大戦中は、当然ながら自動車の数は減り、代わって自転車が大変人気になりました。そして大戦が終わると交通計画の花形は自動車になっていきました。それと同時にその数年前からは、ストックホルム市内には地下鉄が走り出すという新しい変化が起き、これに伴いストックホルムからは自然が消え、また、路面市電も姿を消しました。現在のストックホルムの姿は、自転車の往来も多くなっています。でも自転車の動きは最近の事であり、10 年か 15 年前には政治家が自転車専用レーンをストックホルムから無くしてしまおうという動きをしていた事実がありました。しかし現在はその反対で、自転車見直し政策を押し進める計画があります。この自転車、1980 年代か

ら、乗る人の数の推移は都市部に自転車専用レーンを作るようになってから、飛躍的に伸びている。10 年の間に自転車の交通量がなんと 80%ほどアップしています。もちろん、自転車専用レーンを作っていく事が重要だとは思いますが、これと同時に人々の間で健康志向があった事も一因です。
さて、この自転車専用レーンですが、これらを新たに作る事は、自動車対策と同じスタンスで考える事が重要です。例えば、自転車と歩行者が同じスペースを共用する事は事故を招く恐れがあります。ストックホルムでも東京でも「事故発生」はあると思いますが、自転車の乗り回せる地域を広げていく計画に必要な事は自分達の街だけではなく、自治体とも協力していく事が肝要です。例えばストックホルム市が作ったように、明確な目標を掲げた公式の書類でプランを作成することが重要です。また、自転車と人が通行する数を統計する事も重要です。この事は後でプランの企画を作る事に役立ちますし、自転車の走行は駐輪場に始まり、駐輪場に終わりますから駐輪場もとても重要な問題です。ですから駐輪場を隠そうとしてはいけません。駐輪場は見つけやすくて利用しやすくなければいけません。駅の近くとか、待ち合わせの近くに作るべきです。また、自転車の為の道路標識も必要ですし、自転車走行に何が危険なのかを見極める事も重要になってきます。ストックホルムでは市内の中心地の交差点では死亡事故も起きています。また、トラックとの接触事故も報告されています。
それらの解決策の１つとしては、自転車ボックスがあります。車の前に自転車が乗せられるスペースも登場しています。自転車ボックスが作られてからは１人の死亡事故も起きていないというのが実情です。また視覚的にわかりやすくするために自転車専用レーンを色付けするといった事も試みられています。このほか、サイクリストを増やすために、もう１つ有効な手段は自転車キャンペーンがあります。私達はこれをずっとやってきました。私はこうしたキャンペーンを国の道路公団と一緒にやっているのですが、環境保護団体のキャンペーンでいくつかのストックホルムにある大企業がこの自転車キャンペーンを行いました。

参加者は３、４カ月の間に自転車で通勤することを約束したら、自転車用コンピューターや自転車用ヘルメットの提供、また健康診断が無料で受けられる券があります。このキャンペーンを１年に２度ほど、環境保護団体とストックホルムの市役所が協力してサイクリスト達に「ありがとう」キャンペーンを展開し、お楽しみ袋も手渡しました。その袋の中には自転車にちなんだプレゼント、例えばトレンディーな交通安全の情報であるとか、冊子、関係資料が入っています。今ではその数は１万人になっています。このキャンペーンには、市会議員も参加してくれ、道行くサイクリストと質問が出来るような事もやりました。

このような自転車走行のためのインフラを建設する事の利点は、実はお金があまりかからないという事です。そして、お金がかからないという事だけでなく社会全体にとってもとても良い投資になるのです。スウェーデンの道路公団のストックホルムにおける新たな地域の自転車政策の中では、１SKR を自転車のインフラ整備にかけると社会に 13SKR が還元されると推定されています。ですから、自転車のインフラ整備は環境に優しいのです。この様に、「あなたとあなたの健康にも優しく」「あなたの財布にもやさしく」「社会のためにもやさしい」のです。これが我々の政治家に対するメッセージでもあり、我々はもっと自転車専用道路を建設しなければいけないと自負しております。

なお、個人的に自転車の安全性を向上するにはヘルメットは非常に有効であります。しかし、ストックホルムのある地区の統計では 80%の人がヘルメットをかぶっているという数字がありますが、ストックホルムでは 50%位です。ヘルメットをかぶらない人達は学生達と老人です。この若い人達と年寄りの間の年齢層というのは家族もありますし、家族も安全性を重視しているのですが・・・

これからストックホルムの交通手段について話を移ります。ストックホルムの市の公共機関は現在、路面電車だけでなはなく 100 駅ある地下鉄とか、電車とバスがあって、地下鉄もこれから建設される計画があります。初めにお話ししましたが、ストックホルムの路面電車は 1960 年の後半に全部スクラップされ

ましたが、今またモダンでハイテクな都会的な乗りものとして認められてきていますし、現在のスウェーデンの多くの都市が、この路面電車の建設の可能性を調査中です。例えば、マルメとかルンドなどの大都市においてです。
この路面電車の交通網を作るのは、地下鉄よりもずっと安く、また路面電車は収容能力もバスよりも高い。ですからバスと地下鉄のギャップを埋めるのに一番良い乗り物と言えるでしょう。それに路面電車はバスよりも乗り心地も良いですし、排気ガスもなく、健康にも優しい乗り物です。ともかくストックホルムではこうした一連の交通渋滞や排気ガス問題が発生し、その対策にも様々に考えているというのが実情です。

スウェーデン研究講座　第 160 回　　2014 年 4 月 16 日

「スウェーデン―高齢者と障害者はどこまで自立出来るか」

Emil Ostberg　　Sweden Quality Care

（日本語で講演）
私はスウェーデンの障害者福祉と高齢者福祉について話したいと思います。昨年４月もこの場所で講演しましたが、その時は２時間休憩なしで話をしまして疲れました。そこで今回は休息をはさみます。
最初に障害者福祉について。昨年日本に２週間滞在して、スウェーデンに帰ったらかなり太っていました。日本には美味しい物がいっぱいあり、また、子供ができてからは仕事も忙しく、運動もできなくなり、10 ㌔位太りました。ですから、今回も帰国したら運動しないとダメだめだと思っています。そして５月のストックホルムマラソンには出る予定です。ですから、昨年暮れからは一生懸命運動し、来日前には 10 ㌔位痩せました。でも、今回の日本滞在でまた太るかもしれませんが・・・。さて、今回のテーマは「障害者達はどこまで自立できているのか、また将来的にどういう方向にいくのか、そして日本はどうなのか。また、日本の福祉はどういう方向にいくべきなのか」。それについて話します
まず、簡単に自己紹介を致します。私はストックホルム大学で勉強し、その後アメリカのオレゴン大学に留学、そこで多くの世界中の方に会って英語がどんどん上手になって多くの交流ができ、とても楽しかった。また、オレゴン大学では日本人が多くて、日本の文化や習慣に興味を持ち、日本語を勉強し始めて奨学金をもらい、１年間は早稲田大学で勉強しました。教育以外では小さい時からスポーツをよくやりまして、クロスカントリーのパラリンピックに３回参加し、2002 年のソウルパラリンピックでは、銀と銅メダルを獲りました。日本に住んでいた期間は日本のパラリンピック代表者らと野沢温泉で１か月以上にわたり合宿するなど行動を一緒にしました。
私は７歳の頃に視覚障害者になり、視力は健常者に比べると５％位しかなく、眼球の真ん中は殆ど見えません。このため、新聞記事の字は殆ど見えません。ですから私は仕事をしている時や大学に行っている時はコンピューターの読み上げるソフトと拡大ソフトを使っていました。スウェーデン生まれで育ちの私は、わが国の福祉は世界的にすごく進んでいると思っていましたが、自分が障

害者のため外国で勉強するのはすごく難しいと思って心配していました。しかし、私の知り合いがアメリカの大学で勉強していて、「アメリカ国内の大学でも障害者は色々な試験を受け、簡単に勉強できるよ」と言ってくれたので、私はアメリカに行き、また、アメリカ以外の所にも行きたくなり、日本に来ました。

日本に来るについて心配な事がありました。それは、私はストックホルムに生まれと言っても、郊外です。ストックホルム人口は 100 万人口ですが、郊外は田舎です。そういう所から日本にまで行こうと思っていたのです。ストックホルム市内にも地下鉄が３路線走り、利用者は緑、青、赤の路線で見分け出来る様になっています。しかし、日本の東京に行き、さらに都内にある早稲田大学まで行くまでの交通手段はどうしたら良いのかかなり心配したものでした。このため、私は交通手段や利用が難しすぎる様だったら、いったん、スウェーデンに帰ろうと思っていたほどでした。

次は私のバックグランドです。2002 年のパラリンピックを機に引退し、その後は SQC と言う介護・福祉のノウハウやシステムを提供する団体で仕事をしています。内容は日本と他の国から来るお客さんに、スウェーデンの福祉問題を説明致しています。また、約 2 万人の障害者が働く国営企業サムハルの研修プログラムを提供しています。この研修は一般的な研修は１日から１週間ですが、私達は１カ月や３カ月までの実習プログラムをしています。それ以外の事では、日本に行って色んな所で講演したりしていますが、今回は２週間日本に滞在し、５、６回講演する予定です。

さて、スウェーデンの福祉についてですが、簡単な統計についてお話します。スウェーデン人口は約 940 万人。障害者は国民の 10 から 15%くらい。この数字はアバウトです。それは何が障害かと言う定義づけもはっきりしない事もあるからです。出生率は 1・98。現在スウェーデンで社会問題になっているのは、失業率ですが、８％と結構高い。ですがこの８％は介護職員を見つけるには大変簡単なことです。何週間か前に、ストックホルムで日本人と一緒に高齢者施設を訪問したのですが、日本では介護職員はなかなか見つからないと言い

ますが、スウェーデンの高齢者施設では我々が求人広告を出して２人の介護職員が必要だったのですけど、200 人以上の申し込みがありました。と言う事で、介護職員は現在見つかりやすい。つまり失業率が高いからです。平均寿命は日本に次ぐもので、女性は 83 歳、男 79 歳、国内生産量 GDP は世界で 14 番目。

話は違いますが、皆さん、この事をご存じでしょうか？スウェーデンは税金がとても高いのです。国内総生産の割合で言うと、45%。日本は 25%しかないのに・・・。スウェーデンは税金で福祉政策を行い、保険制度ではありません。つまりスウェーデンの全ての福祉サービスは税金でやっています。そこでスウェーデンの福祉は「障害者は自立しているか」と言ったら、スウェーデンの考え方は 4、50 年前から少しずつ変わってきていて、障害者、高齢者達は「患者から国民へ」という方向へ意識が変わってきている。元々、障害のある方、高齢者達も対応の仕方としては、「あなたは障害がある」「あなたは高齢者であるからゆっくりしてください」「義務や責任もない。出来る事はないから大きな病院型の施設で住んでゆっくりして下さい」という考え方から、現在は、「障害はあるかもしれませんが、自分で出来る事は自分でやらなければいけない」、「障害があっても、高齢者であっても自分の責任がある」という事です。

これから具体的にその話をしていきます。1980 年代に比べて、大型の施設は４分の１ほどしか残っていない。その代わりにノーマライゼイション地域で在宅する小さい施設で支援を受けています。なぜこういう形に変更になったかと言ったら、スウェーデンの民主主義にとって高齢者団体はとても大切です。当事者の障害者団体などは国から活動するための資金をもらっている。スウェーデンの民主主義にとってはそういう当事者の声は非常に大事にしています。（画面は障害者団体のデモ写真）この写真は数年前に撮った写真ですが、障害者達は毎年デモをして「もっとバリアフリーな社会になるべきだ」とデモをしているシーンです。年金受給者団体や障害者団体などは 1960 年頃からどんどん強くなり、自分の意見をはっきり言い始めました。その関係でスウェーデンの福

祉政策は変わってきたのです。つまり、「我々は他の国民と同じ価値観がある。我々は健常者と同じような生活がしたいです」と。このように、スウェーデンの制度は 1960 年から現在まで少しずつ変わってきており、「患者から国民へ」という考え方に変わってきた。
さて、私は仕事でたくさんの日本の人に会い、その多くの質問は「福祉がもっとよくなるためにはどうすればいいのでしょうか」という質問。これについて、私は、国民はどういう風な福祉政策を希望しているのか。それを聞いて日本の福祉を作るべきと答えてきました。その福祉について、スウェーデンやアメリカの福祉を勉強しながら日本はどういう対策をしているのか、また、そういう風に決めた方が良いと思います。しかし、大事なのは当事者の意見を聞いてどういう様な支援を受けたいのか聞くことです。今日この会場に来ている皆さんの間で、もし自分の子が障害者になったら、また自分が高齢者になって脳梗塞などになって色んな介護が必要な時はどんな支援を希望しているのか、それらをよく考えてそれに合わせて日本の福祉を作ればいいのではないかと思います。
先ほど、スウェーデンの福祉は税金でやっている、スウェーデンは税金が高く、また所得税は 30 から 50%までだし、消費税は 25%。日本の消費税は８％ですが、この数字でも国内では大騒ぎになったと聞いています。５％から８％はそんなに高くはないのではと思っているスウェーデン人は多いと思うのですが・・。では、なぜスウェーデンは税金が高く出来るのかについてお話しましょう。この事は国民と政治家の信頼関係がかなり強いからです。障害者達は自分の経済状態に関係なく同じような支援を受けている。グループホームのディセンターなどはお金があるかないかの関係ではなく、みんな同じような支援を受けている。
スウェーデンの考え方はお金がいっぱいある人達は良いマンション、良い車、旅行したりするのはかまいませんが、医療福祉はみんな同じ様なサービスを受けるべきだという考え方を持っています。だから誰か障害者になるとか、高齢者になるとか分かっていて、みんなその時に平等な支援を受けるべきであり、

福祉サービスを提供している側は、高齢者と障害者の場合は市町村コミューンが福祉サービスの提供をしています。福祉対策や課題についてはそれぞれの市町村の議員達が決めます。まあ、具体的な事は政府が法律を作るのですが、それに合わせて市町村は自分でどの様なサービスを提供するのかを決める。そして税金もそれぞれの市町村で決める。
次に行政組織の説明ですが、国会（政府）があって、その下に 21 の県、299 の市町村がある。それぞれ４年に１回選挙があり、今年の９月に選挙があります。これは日本に来る前に調べたデータですが、スウェーデンの県予算の支出は平均的に 40%は病院の治療、16%は初期治療、それ以外は精神科治療、専門的な医療とかで、８割は医療のために使っている。残りの分はインフラとか公共交通があるが、多くの分野は医療とリハビリに使われます。市町村の場合には高齢者福祉の場合に 19%、障害者福祉 11%、基本的に所得税が一般的に 30%であり、この 30%の中に 18%は市町村の方に向けられ、12%は県にというシステムです。
スウェーデンの国民はそこまで払っても良いと思っている人が 50%以上います。なぜならば、介護が必要な時に皆はサービスを受けたいと考えているからです。みんな、良いサービスを受けるために税金を支払うのは当たり前だと思っている方が殆どです。日本はこれから税金を高くして、福祉政策が変わるべきかどうかについては私の立場からは何も言えない。それは日本の国民はどうやってどこまで高齢障害者支援をするべきなのか、それは国民が自分で考えなくては駄目ですね。そして、高齢者、障害者達は自分の意見を強く出して、他の国民に色んな情報などを流して国が考え、次の選挙で国民が決めるべきです。
次は障害者福祉について。障害者の自宅とか、障害者達が成長するためにどういうサービスがあって、どこまで国が支援をしているのか。国は元々、障害者を患者として対処していた。現在は国が支援する目的は「自立させるため」にあります。障害者は健常者と同じ様に、みんな一生懸命に頑張りたいと思っています。ですから、成功できる可能性があれば、みんな頑張ります。しかし可

能性がなければ、みんな諦めるし、達成しなくても失敗する可能性がすごく高かったらやめる人が多い。このためにも、国は障害者達が成功できるよう支援をしなくてはいけない。ここで大事なのは、障害者の親にとって将来的にどういう事が出来るのか、多くの人は自分が健常者達だったら障害者の知り合いはあまりいないかもしれないが、重度障害者が生まれた場合はこの方達にとってどういう将来があるか、そして本人にとってもどういう将来があるのか。これについて病院の立場からも色々と対応しています。例えばダウン症の子だったら、3、40 年前だったら 30 歳くらいまでの寿命で下が、現在は 60 歳くらいまで生きられる。そして前に比べると、大きな施設ではなく、とても施設の整った所に入れるし、良い生活、良い人生が出来る支援があることを早い段階で家族や本人に伝える。私にとっても小さい時から障害者達のお手本を見ており、彼らはがんばって成功できるんだとか、成功できる可能性があると思って一生懸命がんばりました。

その 1 つが統合教育。この制度は大事だと思っています。スウェーデンではかなり重度の障害者でもプレスクールや一般の就学が出来ます。その場合は先生の数が増え、障害者に対応する専門の先生が付添います。このシステムは障害者にとってすごく大事なものであるし、健常者にとっても大事でそうしたバリアフリー社会を作るためにも大事だと思います。障害者という言葉は珍しいものではなく、一般社会の中に障害者や健常者がいるのは当たり前の事です。

この統合教育についてもう少し説明します。数十年前の事ですが、知的障害者は一般の小学校には行かないで、障害者用の学校に通っていました。今はシステムが変わってきて、知的障害用のクラスは一般の学校の中にいます。親は自分の子が知的障害者でも一般のクラスに入れる権利があり、その場合は一般のクラスはいくつかの支援をしなければいけないようになっています。この傾向は増えています。それはなぜか。障害者用の学校に行き、卒業したら一般の大学に行けないし、仕事なども見つかり難い、また障害者用の仕事しか見つからないかもしれないからです。と言う事で少しずつ対応が変わってきています。日本でもスウェーデンでも対応を変えていかないといけないと思います。スウ

ェーデンは方向としては、障害者達の親が障害者用の学校に入れたくなくて、一般の学校に入れたいという傾向が強いからです。
次にディセンター。重度の知的障害者達はディケアセンターに通う人が多いです。昔は先ほど言いましたように、大きな施設に住んでいて昼まではディセンターには行かなかったが、今では立派なディセンターがあり、重度の障害者は色々なディセンターの選択も出来ます。スウェーデンではどんな重度の障害者であっても、ディセンターに行く権利があいます。この様な事が出来たのは1994 年。出来た年から 10 年位は、障害者の親達はすごく満足していた。けれども現在の方向としては、もっとチャレンジしたいし、軽度の障害者達はちゃんとした仕事がしたいという人が増えてきています。
福祉企業のサムハルについて。現在は障害者達が２万人程働いている。その昔は IKEA の家具作りの工場がたくさんあったが、現在は残っていない。これらは皆、その後中国などにいく形になっています。そして今は、生産よりもサービス部門の充実が目立ちます。もっとも家具を作っていた時にその担い手は障害者であるという事を殆どの人は知らなかった。一般の人が IKEA で買い物をする時は、必ず障害者に会います。それは障害者にとって素晴らしい事ですし、健常者にとっても大切な事ではないかと思います。そして現在サムハルでは、4、5%はサムハルから他の所に従業員が移る様に活動しています。また、サムハルではある意味で障害者にためにも良いけれども、できるだけ良い社会を作りたい場合は、障害者のための特別な物があるべきではない。つまり、一般企業で働いてもらった方が、自立とか自由とかもっと心のバリアフリーになるでしょう。そのために国は様々な支援をしています。統計では給料の８割までは国が補助し、補助器具などは全て国が提供しています。アシスタントなどが必要な場合は、国がそこまで補助します。
しかしそれでもまだ健常者に比べると、障害者の失業率は高い。これから会社や社会は心のバリアフリーを作るべきです。こうした支援があっても、失業率は健常者に比べて高いのです。希望としてはサムハルが補助や支援施設が必要ないような社会を作りたいと、障害者達は考えています。

次は重度知的障害者について。スウェーデンでは 1994 年に、LSS 法が出来て、現在は特別援護法があって６万人に対応しております。ですから、知的障害者らは、特別の支援を受ける権利があります。それはグループホームに住むとか、ディセンターに行く権利とか、パーソナルアシスタントが必要であれば受ける権利があります。その資格は、各市町村は LSS 法の法定判定員が来て、そのグループに入れるかどうかを確認し、その結果として国が色々サービスを提供しています。この提供サービスは、障害者が自立できるために、家の補助金、パーソナルアシスタント、ディセンター、グループホームなどです。
また、スウェーデンでは基本的に無料で障害者達は色々な補助器具が借りる事ができます。目的はもちろん自立できるためのものです。その中でも大きなサービスとしてパーソナルアシスタント。例えば、必要とあれば、１人について毎日 24 時間システムの対応をしている場合があります。目的は障害者が自立出来るために、自分で好きな時間で自分が好きな事が出来るという事です。この様に、スウェーデンでは障害者と健常者の共存ができる福祉社会が確立されていると言っていいでしょう。そして、日本が目指す福祉社会は前述した様に日本国民が自ら考え、障害者達の現場の声を聞いて対処する事だと思います。

スウェーデンのニッポン人（６）

その昔、『パンパン』と言われた　天葉　和歌子

天葉　和歌子(てんば　わかこ)1931 年生まれ。1967 年に渡瑞。日本では看護婦で、スウェーデンではコック、現在は年金生活者。

私は小さい時はおてんばで、良くケンカをし、男の子をいじめたので、親が苦情を言いに来ていました。
家は製材業を営んでいて、戦争中は軍属になっていました。終戦直前、空襲で家は焼けてしまいましたが、製材所は焼け残ったので、近所の人たちの避難所となりました。
戦後、工場は破産してしまいました。父親はそれを苦にして自殺しました。私が十九歳位のときだったと思います。材木置き場を昼食レストランに改造し、母親が営業を始めました。敷地は大きな国道に面していたため、地の利がよかったのです。レストランを手伝っていましたが、その頃、マーロン・ブランドが主演の「なんとかの天使」と言う映画を見ました。オートバイに乗るブランドはとても格好がよく、刺激を受けました。それでオートバイに興味をもち、家からお金を持ちだして、女二人、男六人の仲間と異性ハントをはじめました。私たち女性は男をハントするのです。そしてお金をとりあげました。刺青もしました。それが母親に見つかって、無理やり病院に連れて行かれ、刺青を消しました。そう、かなり遊んでいたのです。
そのうちに母や兄弟が心配をし始め、日本赤十字看護婦養成の専門学校に強制的に行かされました。兄貴は警察学校の柔道の先生で、怖ろしい存在でした。おまけに八歳位年上でした。
二年後、二十四歳のとき、看護婦学校を卒業し、舞鶴重工造船所の診療所に二年間のインターンとして働くことになりました。
ある日診療所に、後に夫となるスウェーデン人のハンスが訪れました。彼はギャランティ・エンジニアとして、イスラエルの国籍をもつドイツの船会社から

派遣されて私の会社に勤めていたのです。手にちょっとした怪我をしたので、包帯をしてもらいに診療所にやってきたのでした。
ギャランティ・エンジニアと言うのは、注文の船が出来あがり、初航海のとき一緒に船に乗り、なにか異常が起こったときには、すぐさま対処するという職業です。
彼は私に手当てをしてもらい、感激して花とチョコレートを持ってお礼に来たのです。そして食事に誘われました。私は、伸士的で素敵な人だと思いました。
戦争が終わってから十年位たっていましたが、その頃の日本人はまだまだ外国人が苦手で敬遠していたのです。ハンスが診療所に入ってきたときも、他の人はそっぽを向いて、知らないふりをしました。相手にしたくなかったのです。でも私はどうってことないとばかり、怪我の手当てをしたので、ハンスは感激したようでした。
レストランでも私の椅子をひいて座らせてくれたり、とても伸士的で、私はぽっとなってしまいました。そのうちに結婚することになりましたが、家族はみんな反対でした。外国人は困ると言われました。
実家に彼と一緒に帰りましたが、外国人は家に入れない、お前は「パンパン」だと言われました。当時は外を白人の男性と歩いているだけで、パンパンといわれたのです。パンパンとは何か、若い人は知らないかも知れませんが、終戦後、国中が貧しく、食べるものも満足になかった頃、外国人男性を相手にして生計をたてていた女性のことです。
神戸のスウェーデン領事館で結婚式を挙げました。三十歳あたりです。実家からは誰も出席しませんでした。絶縁するするとまで言われました。でも、母から内緒で黒真珠の立派なネックレスを貰いました。絶縁したものの私のことを不憫だと思ったのでしょう。実家へは出入りを禁止されました。それも六年ほどで許されましたけど・・・。母は九十四歳で亡くなりました。

ストックホルムへ

新婚旅行はハンスの仕事の船に一緒に乗ることでした。そのままスウェーデンに行きました。ハンスは船を降りて、ストックホルムで普通のエンジニアの仕事に就きました。私はインターンとして准看の資格で働き始めました。でも、スウェーデン語が難しく、とくに薬の名前がどうしても覚えられません。それで看護婦の仕事を断念しました。

その後、栄養士の資格をとって、市の高齢者施設でコック代理として働き始めました。そのうちにコックが辞めたので、私がチーフコックとなりました。ほかのキッチンのスタッフは、外国人のチーフの下で働くのは嫌だと文句を言っていましたが・・・。そのままずっとそこで六十八歳まで働きました。人手不足で六十五歳で定年だったのですが、残ってくれと頼まれたのです。

日本を出るとき、友人に勧められて創価学会に入会しました。世界中に支部があるので、何かと安心だと言われました。入会してよかったと思います。毎日お祈りをしています。言われる通りにしていたら、必ず良い方向に進むのです。

オートバイは船に乗せてスウェーデンまで持っていって乗っていたのですが、夫が近所に格好がわるいといって、売ってしまいました。今と違って、スウェーデンでも女性はまず乗ってはいませんでしたからね。

ハンスはずっと前に亡くなりました。今は一人でストックホルム近郊のアパートに住んでいます。市が派遣のヘルパーが、家事を手伝ってくれています。

もっと色々話すことはあるのですが、疲れたのでこの次にしてくれませんか。

(聞き手・編集室)